

最近のアメリカのタクシー事情



運転手は世界の各国、各地から

アトランタ、ニューオーリンズ



—昨年、「風と共に去りぬ」の出版70周年の取材でアトランタとニューオーリンズを訪れました。その際、タクシーを5回利用。そのつど運転手との会話のなかで、アメリカの歴史の一断面を見るような思いがしました。人種的には黒人が3回、白人が1回、東洋系が1回でした。

アトランタで最初に乗ったタクシーの運転手は黒人でした。出身国を訪ねたところナイジェリアだといいます。彼は私が降りる間に言ったのです。「さあ、これから家に帰ってワールドカップを観るんだ。きょうはガーナとアメリカの対決だぜ。しっかり応援しなくっちゃ」

「どちらの国を応援するんですか?」と興味半分の私。「そりゃ、もちろんアフリカさ! 同胞のガーナよ。ギニア湾にあるお隣の国だしね」。アメリカに住んで15年になるというけれど、その心情はわかるような気がしました。

翌日に乗った運転手はハイチ出身。ドイツで日本がブラジルに敗れた直後でした。「王者ブラジル」相手だからしょうがないよね。自分は『どこの国を応援』というより、やはりブラジルのように高い技術を評価するネ」

アメリカはやはり「サッカー」よりも「野球」の国なのでしょう。行く先々でヨーロッパや南米諸国のように、サッカーの熱狂を感じるような光景には一度も遭遇することはありませんでした。

記憶に残るもう一人は、ニューオーリンズ空港からホテルまで乗ったタクシーの運転手です。こちらをアジアの同胞と見たのか、最初はニコニコ顔ながら、やがて厳しい表情で彼は言ったのです。

「あなたは、また家族がいる日本に帰れるんでしょう? いいですね! 私の出身はベトナムです。アメリカに来てもう30年。正確に言えば、母国から逃げてここに来たのさ。自分は南ベトナムの軍人だった。アメリカが応援した戦争で北ベトナムに敗れた。その直後、家族を残したまま亡命せざるを得なかったんだ!」

ヒューストン、ニューヨーク

昨年11月、10年ぶりにパナマを訪問しました。タクシーは往路のヒューストン、帰路のニューヨークで計4回。そのつど運転手に話しかけましたが、今回も彼らの母国は多様でした。ヒューストンではエチオピアとエジプト、ニューヨークではドミニカとエクアドルを母国とするドライバーでした。それぞれが母国語なまりの英語です。

最初のエチオピアからの運転手には閉口しました。空港で私のトランクを奪うように車に積み込み運転を始めたのはいいのですが、なんと目的のホテルとは反対の方向に走り、メーターが80ドルになってから気がついたのです。

運転手は「電話で確認してみる」と。ところが彼の携帯電話は故障中。そこで、なんとアメリカに着いたばかりでまだ調整もしていない私の携帯電話を借りて、ホテルに場所を確認しつつの運転になったのです。こちらは成田からの長旅で疲れ、時差で眠いのにも、1時間以上も走り回られ、しかも料金160ドルを請求されたのです。当方には何の非もありません。ここは強く出るに限る! そこで私も日本語なまりの英語をまくしたてて反論、ドライバーの非を責め、100ドルまで下げさせたのでした。

帰路のニューヨークでは9.11のテロ爆破点グラウンド・ゼロを訪れました。運転手はエクアドル出身。私もかつて同国を訪れたことがあることから話が弾みました。首都キト郊外にある赤道標が変わったことからガラパゴス諸島の環境汚染まで。記念写真を撮ってもらったり、アメリカでスペイン語が通じたうれしさに、思わずチップもはずんでしまったのです。

都合3回の訪米に際し9回乗ったタクシーの運転手の母国は9カ国。この多様性! 単一民族国家で外国人の受け入れに厳しい日本と比べて、大量の異民族を受け入れ消化していく大國アメリカの懐(ふところ)の深さに改めて感銘したのでした。



再建工事が進むグラウンド・ゼロで

